
世界で1番欲しいモノは君

朱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界で一番欲しいモノは君

【Zコード】

N6114C

【作者名】

朱

【あらすじ】

彼氏いない歴十六年の高校生サキ、その幼なじみの寿獅との関係は友達以上恋人未満。進展はあるのか？

『ねえ、サキはさ、好きな人いないの?』

そんなことこわれても。

『あたしゃうこうの興味ないから』

そう返せばあたしの右に座る親友の綾乃から不満げな声が聞こえた。
しうがないじやない、ほんとに無いんだから。興味。

結構長いため息をつきながらあたしは今年着たばっかの少しパリパ
リしててスカートを折り曲げて机に座る。

『いーからそんな話』

もともと男っぽいあたしはそこら辺の女子と違つて高校生（あーあ
もう一歳だよ、）になつてまで全くといつていいくほど恋愛に興
味がない。

彼氏なんて作ったこともなくつくれと呟つたこともない。まあ
よーするに一言で言つと、

「枯れて』サ~キちゃん!』

『、、、、、、、、、、、、、、はい?』

『あ、レオじゃん』

『ウッセーそのあだ名マジでやめぬ』

都古 寿獅（みやい・と）。あたしの小学生からの幼なじみで、とことん不良。頭
は金髪で、制服はだらしなく香木臭いし。ほんとにまじでありえ

ない。

『名前に【獅】入ってるし髪型とかまんまライオンじゃん?だから
レオ!』

綾乃は見下したように笑いながらそう言った。おこりだす寿獅の頭を見て、たしかにライオンぽいなあ、な、なんて考えたり。だまって髪黒くしたらソコソコかっこいいの!』

中学一年で綾乃が加わって、恋愛経験豊富な綾乃はわたしにそういう系の質問しかしてこない。ハツキリ言つて嫌なんだけど、やっぱり綾乃だし、付き合つてやることにした。

『なあ、ふたりとも今から恋こいするかあ?』

『こまから?、、、、へーせだけど』

『あたし無理!…ちょっと出掛ける用事あるから』

『そつか、じやあふたりで、、、、『綾乃がいないんならあたし行かない』

『、、、、、、』

なんか床にのの字書き始めた寿獅をほっぽつてあたしは何も付いてないかばんを肩に掛けた『またあした』それだけ言つて教室をでた。

後ろからなんか騒いでる教師の声が聞こえたけどシカトした。あ、そういうやまだ5限目だった。あーもーめんどくさいな。

ちょっとと考えてサボることにした。やつとあいつならサボるだらう
と思ったから。

なんであの馬鹿でウルサイライオンが脳裏に出てきたのかは知らない
いけど

一日後。

中間テストも近くなつて勉強モードに包まれる中、あたしは一人机
に突つ伏して寝ていた。

なんとなく寿獅のこえが聞こえたきがしてその方向に重い頭を回し
た。

『だからそこは - - -』

『あ、そっかあ！ありがとうー』

ヽヽヽなんだ。

あいつ彼女いるんじやん。一人で勉強なんてかわいー」としちゃつ
て。似合わないんだよその金髪には。

二人を見れば見るほど妙にイライラしてきて胸が締め付けられる感
じがした。

足元から沈みそうな感覚があたしをおそつて。わけも解らず顔を元
の場所にもどした。勢いありすぎて頭ぶつけたかな、ヽヽそれさえ
も考えたくなくて必死で眠りについた。

『おい、サキ』

四、文法

起きて

100

今すぐ起きねーとチューーすんぞ

ガバッ！！！！！

死ねつ！

バコツと物凄いいい音がして精一杯力を込めたあたしのかばんは寿獅のあたまにヒットした。

『イッテー！！！！！』

なにも殴る」とねーだろ!

卷之三十五

寿獅は頭のてっぺんを両手で押さえながら涙目であたしを見た。おまえいくつだよ気持ち悪い。

あたしは自分的に1番怖いだろう睨み方をして。

『キモい』と呟つなかつ。』

眠る前のイライラと今の胸の高鳴りをどう説明しようか。今までのあたしならこんな風にはならないのこー（ロイシの）いうことの発言は日常茶飯事だ。）

ああ もう！何なのよー

『あたし帰るーー。』

ガタッと机と椅子を鳴らせて勢いよく立ち上がる。

『帰るつておまえ、もう七時半だぞ？』

『ヽヽヽヽヽヽヽ』

『だから、おまえが真昼からこままでずっと寝てたつてこと。』

寿獅は淡々と混乱するあたしに解りやすくこよつこよつと聞いてくれた。

『、綾乃は？』

『帰つた。用あるんだと』

『、へえ』

このあたしのいかにも不機嫌な声。寿獅もあたしも黙りこくつて、一人の間には沈黙が流れ出す。

その沈黙を破ったのはあたしじゃなくって。

『帰るぞ』

『え』

『送るから』

いきなり腕を掴まれて引っ張られるままについていく。頑張つて速足で歩くけど、やっぱり男だから寿獅のが速くて。

寿獅があたしの腕を掴む手に力を入れるたびに胸が苦しくなった。

『ねえ、寿獅、速いよ』

家に着くまでに何回話し掛けただろう。それでも返事は全然なくて。いつものウルサい寿獅じやなくって正直怖かった。

結局一言も話さないままであたしの家に着いた。

『』

あたしはこの空気が重たくて何も言えなかつた。
寿獅はなにか考え込むようにして目を伏せていて。

『、、、サキ』

不意に自分の名前が呼ばれて、その声の発信源に目を向けた。

『なに?』

そつとおひと口を開いた瞬間、あたしは抱きしめられていた

『な、に、? 寿獅?』

『悪い、急に。でも聞いてくれ』

『、、、「ん」』

煩いほどに胸は高鳴って、返事するので精一杯だった。少し耳を澄ますとあたしと同じくらい速い寿獅の心音が聞こえてきて、なんだか解んないけど無性に嬉しくなった。

『俺わあ、中学一年のときお前に惚れてたんだ』

『、、、初耳』

『だらうな、誰にも言つてないかい』

寿獅は少し笑いながらそいつた。確かに初耳だった。だけど『惚れてた』その言葉が過去形になつてることがなぜだか哀しくて。

『離して』

『最後まで聞け馬鹿』

寿獅は自分の胸板を押しているあたしの手をいつも簡単に元の位置に戻した。

『今でも、つーか今までずっと好きだった。もちろんこれからもだけどだから、俺だけの女の子になつてください。』

ヽヽヽ恋愛なんてくだらない。あたしにはそんなの関係ない。

そう思つてた。ずっと。

まっすぐあたしを見つめる寿獅の顔は、今までで一番かっこよくて、凛としていた。

くだらないと思っていた恋愛が、君の言葉でこんなにもキレイに思えてくる。最高に幸せなモノだと思えてくる。

ねえ、愛しい人

傷を負わない恋なんていのまじないけれど、

やつてみよつか無傷の恋

あたしが夢に見た甘い恋、

君となりっこなつて

思つたんだ

(後書き)

初めて書いたんですけど、どうだつたでしょうか、これからも頑張つていいくので宜しくお願いしますーー！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6114c/>

世界で1番欲しいモノは君

2010年10月9日14時00分発行